

真の平和をもたらす王

イザヤ書11章1～10節
2022年12月18日
松田 基子 師

待降節の第4主日を迎えました。来週は愈々、世界の真の救い主、イエス・キリストの御降誕を喜び祝うクリスマスです。神の御子イエス様は、人の世に生まれて来られ、人類の身代わりの十字架に架かり、人類のために救いの道を開き、天に帰られましたが、真の平和をもたらす為、再び来て下さる事が約束されています。私達は再臨のイエス・キリストを平和の王として、どれ程待望しているのでしょうか。

さて、神様は天地万物を創造され、愛と平和を築いて行くために創造された世界を、人間に託されました。しかし、人間は誘惑者の言葉に惹かれ、神様の言葉を疑い、神様の命令を破り、神様に叛いてしまいました。神様に敵対させる誘惑者の支配を許してしまったのです。そのために、人間の心は自己中心となりました。**自己中心に生きる、それは他者を自分の利益のために、踏み台にする事**です。聖書は、人間が如何に自己中心な存在であるかを、綴っています。

人類の最初の兄弟として描かれているカインとアベルは、兄弟で、愛し合い、助け合うべき存在なのに、兄カインは弟アベルに嫉妬して、弟を殺してしまいました。人類の歴史は、その初めから自己を絶対化して、意に添わなければ、兄弟さえも殺してしまう、その様な世界をスタートさせました。以後、人類の歴史は争いの歴史を綴っています。神様は、そう言う人間の罪の歴史を、神様に聴き従う歴史に変えようと、神様に聴き従う人物を求めて、呼び掛けられました。その呼び掛けに従ったのが、イスラエルの先祖アブラハムでした。

神様はアブラハムの子孫を、神の民に選びエジプトの奴隷から救出し、神様に聴き従うよう、律法を与え、神様以外に頼るものがない荒れ野で、40年にわたって、御言葉に聴く訓練をされました。約束の地、カナンに定住後、真に神様を愛し、神様に聴き従った一人の王がいました。

その名はダビデです。神様は彼に、サムエル記下の7章16節で、

「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」

と約束されました。この約束こそ神様がダビデの系譜を用いて、御自身の御子を世にお遣わしになり、真の平和を与えようとされた御計画を示すものでした。

ダビデの死後、王位はソロモンが継承しました。ソロモンは神様に愛され、知恵が与えられたにも拘らず、神様の前に遜る事を忘れてしまい、自己中心で栄耀・栄華を極め、多くの妻達による偶像礼拝を許し、神様に叛きました。ソロモンの死後、紀元前922年、国家は分裂してしまいました。イスラエル12部族は、10部族で北イスラエル王国を作り、残りの2部族、ユダ部族とベニヤミン部族で南ユダ王国を守りました。それは小さな国になりました。それでも、ダビデの直系が王位を継いで行きました。南ユダは、小さくとも、そこには神様がその名を置いてくださったエルサレム神殿がありました。しかし信仰的にも政治的にも乱れていました。その様な中で、神様に対する信仰を守り、王や同朋の間違いを正した預言者がいました。それはエルサレムの預言者イザヤです。彼は神様に従おうとしない王や民を諫めました。イザヤ書1章1節には、

「アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻。これはユダの王、ウ ज्या、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである」

とあり、6章1節に、

「ウ ज्या王が死んだ年のことである」

とあります。ウ ज्या王の死は、紀元前742年とされています。イザヤはその時、20歳くらいであったであろうと言われてはいますが、この時から、イザヤの本格的な預言活動が始まったとされています。

彼はその子の、ヨタムまた、続くアハズ、ヒゼキヤの治世40年にわたって、預言者として王と民を諫めました。イザヤと言う名前は

『主の救い』

と言う意味です。彼は名前の通りに、神様に対して絶対的な信頼を抱き、

『神様のみに頼る所に、イスラエルの

全ての解決がある』
と確信して、その事を王と民に訴えました。
一方、ダビデの血筋を汲むユダ王朝の王達は
ダビデの様に、

『神様を慕い、求め、神様第一の
政治をする王はいませんでした。』
ウジヤの子ヨタムは、父の病の時から摂政として、
政治に携わっていました。その頃のパレスチナ
の情勢は、南に大国のエジプトが君臨していま
した。東にはアッシリア帝国がありました。
パレスチナ地方の小国群は、アッシリアの脅威
に曝されていました。

アッシリア軍は、その残虐性で恐れられてい
ました。ヨタムの晩年には、ユダ王国の北に位
置する北イスラエルやシリアに、アッシリアの脅
威が迫っていました。彼らは、反アッシリア同
盟を結んでヨタムの死後、アハズにも同盟に加
わるように、強要しました。しかし、アハズがそ
れを拒否したために、両軍は南ユダを攻撃し、
被害を受けました。アハズはアッシリアの強さ
を感じていましたので、アッシリアに近づこうと
していました。その様なアハズ王に、イザヤは、
『どちらにも組みしないように。ただ、
神様だけに信頼して、中立を保ち、
地上の争い合いに、巻き込まれない様に』
進言しましたが、アハズはイザヤの進言を退け、
アッシリアのティグラト・ピレセルに援軍を求めた
のです。

イザヤはそこで、イザヤ書7章14節で、
「見よ、おとめが身ごもって、男の子を
産みその名をインマヌエルと呼ぶ」
と預言しました。インマヌエルとは

『神が我等と共に居られる』
と言う意味です。

『神様が共におられる。実はこれ
以上の確かさはない』
のです。しかし、アハズは、

『目に見えない神様を頼りにするよりも、目の
前の覇者、アッシリアのティグラト・ピレセル
の方が頼もしく思われ、自分に利益をもたら
してくれる。きっとイスラエルを救ってくれる
に違い無い』
と思い、彼に援軍を求めました。

イザヤはアッシリアの狡猾さを良く知っていま

したから、シリアも北イスラエルも蹂躪され、ユダ
もまた服従させられる事を見抜いていました。
結果はその通りになりました。その様な中で
イザヤは、

『神様は必ず、約束を果たされるお方で
あり、ダビデの系譜に、乙女から
インマヌエルと呼ばれる王が出現する』
事を確信していました。イザヤは神様に絶対
的な信頼をおいて、9章5節で、さらに、
「ひとりのみどりごがわたしたちのために生ま
れた。ひとりの男の子がわたしたちに与えら
れた。権威が彼の肩にある。その名は、
『驚くべき指導者、力ある神
永遠の父、平和の君』
と唱えられる。ダビデの王座と、その王国に
権威は増し、平和は絶えることがない。
王国は正義と恵みの業によって、今もそして
とこしえに、立てられ支えられる。万軍の主
の熱意がこれを成し遂げる」
と預言しました。

イザヤは前のインマヌエル預言に続いて、
『強国がどの様にユダ王国を攻撃しようとも、
神様がダビデの系譜を守り、一人の驚くべき
王を誕生させられる』
と預言したのです。イザヤはその存在が
『地上の争い、戦い、奪い合う王とは、
全く性質を異にするお方である』
事を預言しています。

「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、
平和の君、と唱えられる」
と言っています。権力と武力で押さえ込んで、
ものを言わせないこの世の王とは全く違います。

その様な神様がお遣わしになる王によって
支配される王国は、正義と恵みの業が行われ、
それは地上の王のように、一時の間に限られる
ものではなく、永遠に続くのです。その様な恵
みを、

『神様が、御自身の熱意、人類への
愛から成し遂げてくださる』
というのです。イザヤは、その確信を伝えま
したが、アハズは聴く耳を持ちませんでした。
紀元前715年に、アハズの死によって、その子、
ヒゼキヤが王位に就きました。彼は、父アハズ
の、親アッシリア政策によって、偶像が蔓延した
エルサレムをイザヤの導きで一掃し、宗教改革

を行いました。彼は神様に信頼することを願いつつも、目の前の現実、その恐怖から、強国の力にも頼ろうとしました。

彼は、アッシリア軍がエルサレムに攻めて来た時、人間的にエジプトに頼り、イザヤに進言されると神様に頼ると言う、生き方をしました。どの時代も、王は神様に聴き従わず、指導者達は自分の利害に走り、権力者は弱者を顧みず、不正が横行し、貧富の格差は増大し、皆、偶像を拝み、信仰的にも政治的にも失望せざるを得ませんでした。しかし、イザヤは、その様な暗さの中で、神様から幻を与えられたのです。それがイザヤ書、11章です。1節から10節までの、標題は『平和の王』となっています。地上に平和の王が見当たらない中であっても、イザヤは神様の約束を信じ、神様に期待しました。11章1節に、

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる」

とあります。

神様は

『ダビデの子孫に、永久の王座を与える』と約束されました。

『木が切り倒された後、その切り株から芽が出て来るのは、とても元気な芽』だそうです。エッサイは、ダビデの父です。名も無い羊飼いの一族から、神様はダビデを選び、その信仰に応じて、永久の王座を約束されました。私達は、この預言が、イエス・キリストであることに気付きます。やがてダビデ王朝は、バビロンに滅ぼされ、その木は切り倒されてしまうのです。しかし、神様の熱意は、その株から力強い、ひとつの芽を出させられるのです。誰もダビデの子孫とは分からない、名も無い大工の子として。しかし、神様は確かなダビデの血筋から御子を誕生させ、力強い若枝として育てられるのです。その存在が、何よりも神様の御計画であることは、その上に主の霊が止まることです。

イエス様は洗礼者ヨハネから、洗礼を受けられると、聖霊は鳩のように真っ直ぐ、イエス様の許に降りてこられ、聖霊は常に、イエス様から離れられる事はありませんでした。未だイエス様

を知らないイザヤは、ここに神様がお与えになる、理想の王の姿を記しています。

主の霊はどのような力でしょうか。

「知恵と識別の霊」

とあります。王として必要な資質は、

『物事を正しく判断し、公正に裁く力』

です。知恵と識別の霊とは、その判断する能力、物事の真実を見抜く能力の事です。次に、

「思慮と勇気の霊」

とあります。思慮深いとは、物事の洞察力に優れている事です。しかし、考えてばかりでは、前に進みません。踏み出す勇気が必要です。次に、

「主を知り、畏れ敬う霊」

とあります。知ると言うのは「知識」だけの事ではありません。愛すること、人格的な交わりから生まれる、信頼に立つものです。おそれは畏敬(いけい)の「畏」で、神様への信仰、神様を深く敬い慎(つつし)むことです。

「彼は主を畏れ敬う霊に満たされる」

とあります。

人間の知識や判断は、部分的であり、偏りがあり、真に正しい判断は出来ません。神様に尋ね求め、聴き従うためには、神様の霊を求め、その霊に満たされて、初めて神様の御心である、霊的な判断が出来るのです。そして、

「目に見えるところによって、裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。」

その様な正しい、憐れみある政治を行う事が出来るのです。

しかし、また、王はただ、憐れみだけではその使命を果たせません。4節から、

「その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる」

とあります。罪と悪に対しては、毅然として権威を以て処する力が必要です。その王は、

「正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる」

と結んでいます。正義と真実こそ、王に求められるものです。神様に結ばれる以外、その様に、人を治めることは出来ません。

イザヤは人間の王に失望したのですが、『神様の約束を疑うことなく、彼は神様がダビデの切り株から出てくる新しい芽、真の王・メシアを、必ず送って下さる』と、信じて、メシアによる王の姿をここに描いています。それは、正しく、

『イエス・キリストの誕生と、キリストに依る神の国の到来、真の平和の王である、キリストの到来』

を預言したものでした。歴史はイエス・キリストが再臨され、万物が新しくされ、神の国が到来し、キリストが王となられた時、真の平和がもたらされるのです。それは争いの全くない、何もかも害する事のない、人と自然が調和した世界です。

6節から、

「狼は小羊と共に宿り、

豹は子山羊と共に伏す。」

「子牛は若獅子と共に育ち、

小さい子供がそれらを導く。」

「牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく

干し草を食らう。」

「乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、

幼子は蝮の巣に手を入れる」

とあります。自然界の弱肉強食の世界は、一変して、神様が創造された原初の世界に戻っています。

9節に、

「わたしの聖なる山においては、

何もかも害を加えず、滅ぼすこともない」

とあります。わたしの聖なる山と呼ばれるのはエルサレムですが、ここではヨハネの黙示録の、天から降りてくる、新しいエルサレムが連想されます。その日こそ、

「水が海を覆っているように、

大地は主を知る知識で満たされる」

のです。メシアによる神の国の到来です。

10節に、

「その日が来れば、エッサイの根は、

全ての民の旗印として立てられ、

国々はそれを求めて集う。

そのとどまるところは栄光に輝く」

とあります。エッサイの根から出る若枝こそ、

イエス・キリストであり、そのお方によって、世界は救われ、真の平和が与えられるのです。このお方の旗印の許に集まる者は、皆救われるのです。イザヤはイエス・キリストがお生まれになる700年も前に、真の平和をもたらす、真の王を、神様からの啓示を受けて預言しています。

私達が生かされています、今の時代も、罪と悪が蔓延する、混迷の時代ではありますが、今やイザヤが預言した、エッサイの切り株から誕生されたイエス様は、十字架の死と復活により、人類に救いの道を開いて下さいました。そして、福音は全地に宣べ伝えられています。私達は今こそ、イエス・キリストによる真の平和が打ち立てられる神の国が到来することを、神様の約束と信じて、

「主イエスよ、来てください」

と、祈り求めようではありませんか。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

イザヤの、真の平和の王の預言であるイエス様を遣わし、救いの道をお開き下さり、有難うございます。

しかし、未だ、この世界は争いに満ちています。

“汚れと争いは いつの世にか消ゆらん
平和の君イエスの 来たり給うまで絶えじ
主よ疾く来たりて 世界を治め給え
み民は忍びて 御世を待てり“ (新聖歌 464)

の讚美の如く、特に待降節のこの時、イエス・キリストの再臨による神の国を待ち望む者として下さい。

尊い救い主・イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。